

実践報告

大学体育と地域活動の連携

——指導経験からの模索——

Enrichment of university physical education:
Exploring from regional collaboration

高瀬 武志

桐蔭横浜大学法学部

(2017年9月28日 受理)

I. はじめに

高等教育機関である大学において体育を学ぶ意義は多様で深遠なものがあることは間違いない¹⁾。しかし、特に本学法学部において体育実技科目を受講する学生の多くは、その実技科目の専門家になる者は希少なため、実技科目における技術の習得のみに焦点を当てた授業形式では、学生の将来において有意義な授業とは考えにくい。

大学体育の充実を考察するにあたり、受講している学生に技術の習得以外にプラス a として何を学習し習得させられるかが重要であると考え。そこで、本論では従来の体育実技の授業に2つの新たな取り組みを加えてみることにした。

1つは、昨今の教育現場で注目されるようになった「アクティブラーニング型授業」²⁾を体育実技科目に取り入れることによって、教員から学生への一方通行的な学習スタイルではなく、学生が主体的に学ぶこと、学生と学生の間で学びの機会が生まれ、学習意欲が高まり、理解度や習得度が深まるような工夫を目指した。

もう1つは、近年になって、その必要性が強く求められるようになってきている「地域貢献・地域連携」といった「地域貢献活動型フィールドワーク」³⁾である。これは、大学と地域との連携を図り、学生の学びの場を大学内の教室や体育施設に限定せず、小学校のキッズクラブ⁴⁾や地域クラブ⁵⁾の協力を得ることによって、学生には現場に根ざした実践的な学びと実技種目へのより深い理解ができるような工夫を目指した。

本論では、筆者が担当している大学体育の体育実技科目(剣道)に焦点を当て、本講義を受講している(過去に受講していた)学生が以上の取り組みを通じて何を感じ、学習したかを明らかにすることによって、大学体育の充実に向けた足掛かりの1つとしたい。

II. 研究方法

本論では、筆者が担当している体育実技科目の剣道を受講している(受講していた)学生が「アクティブラーニング型授業」と地域活動との連携を念頭に置いた「地域貢献活動型フィールドワーク」をもとに、技術の習得

以外に何を感じ、学習したかを知るために、アンケート調査を実施し、その結果をもとに考察し明らかにする。

アンケート調査の対象となる学生は、大学の体育実技科目として剣道を受講した学生で、地域活動にける指導員として実際に指導した経験を有する 20 名の学生とした。

アンケート調査の内容は以下の Q1～Q5 である。

Q1： 実際に指導する側を経験して、授業で学んだ内容の理解は深まりましたか？

Q2： 実際に指導する側を経験して、まだ理解していない部分などは明確になりましたか？

Q3： 地域へと活動範囲を拡大してみて、大学内だけでの学びとの違いはありましたか？

Q4： 大学体育（剣道）の充実を図る上で、地域活動との連携について、どう思いますか？

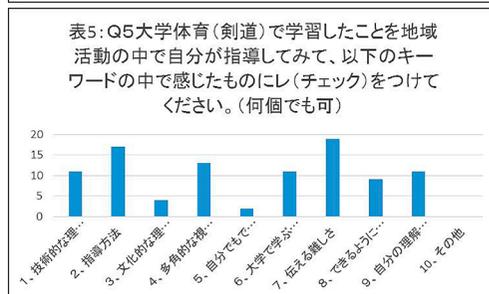
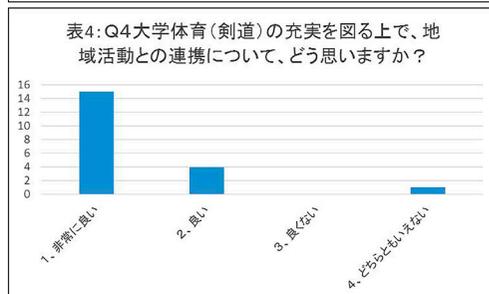
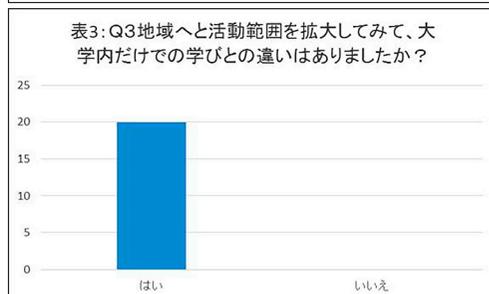
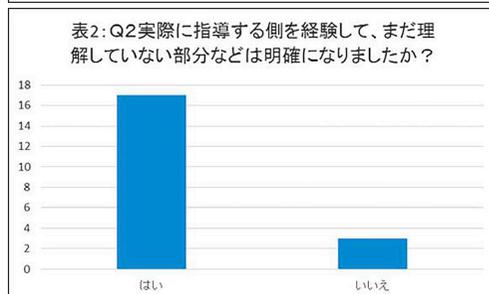
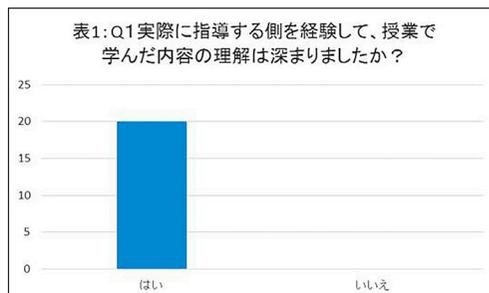
Q5： 大学体育（剣道）で学習したことを地域活動の中で自分が指導してみて、以下のキーワードの中で感じたものにレ（チェック）をつけてください。（何個でも可）

- 技術的な理解度
- 指導方法
- 文化的な理解度
- 多角的な視点（指導者と受講生）
- 自分でもできるという自信
- 大学で学ぶことの良さ（レベルの高さ）
- 伝える難しさ
- できるようになる充実感や楽しさ
- 自分の理解度の現状
- その他

Ⅲ. 結果

大学の体育実技科目のなかで、剣道を受講した学生で、地域活動にける指導員として実際に指導する経験を有する 20 名に実施した

アンケート調査の結果は以下に記す表 1～表 5 の通りである。



IV. 考察

学生 20 名に実施したアンケート調査の結果をもとに、「アクティブラーニング型授業」と「地域貢献活動型フィールドワーク」を学生たちはどのように受け止めているのか、大学体育の充実に資するものであるのかを考察していきたい。

まず、Q1 の指導を実際に行ってみて授業で学んだ内容への理解が深まったかという質問に対しては、全員が「理解が深まった」と回答している。特に多かった意見としては、授業で教わった内容を自分が実際に指導する際に、知識や動作のコツといったものを自身の中で整理し、指導対象のレベルに合わせて言葉を選び指導するプロセスの中で、学びの理解が深まったというものが多かった。

また、自分が教わる立場から教える立場に変わること、「教わる」という受身の姿勢から「教える」という積極的な姿勢が生まれていることや初対面の相手に対して指導することに対する責任感といったものが芽生えていることが回答意見に多く見られる。

大学内の顔見知りの学生同士では、馴れ合いが生じやすく緊張感に欠ける。しかし、見知らぬ学習環境で初対面の相手に指導を行うとなると自然と緊張感が生じるため、真剣な態度が醸成されやすい。アンケート調査は行っていないが、学生指導員を受け入れる側の地域の方々も大学や学生の取り組みに理解と温かい対応をしていただいている。これは「地域貢献活動型フィールドワーク」の成果であると考えられる。

さらに、他の学生の指導を参考にすることによって、新たな気づきや理解度の習熟を感じている学生もいた。これは教員から学生への一方通行的な教育では得られない成果であり「アクティブラーニング型授業」の成果であると考えられる。

次に Q2 の実際に指導する側を経験して、まだ理解していない部分などは明確になった

かという質問に対しては、17 名の学生が明確になったと回答している。特に多かったのは、授業の中でわかっているつもりでやっていた事が、実際に自分の言葉で指導する解説するとなると言葉が出てこなくなったという回答意見である。

また、改めて自分の動作を振り返ると理解できておらず、感覚でやっていたことに気づけたという意見や指導する内容に対して質問される言葉のニュアンスが変化することや指導対象のレベルに応じて臨機応変に指導内容や言葉がけ等を変化させることができなかったことから理解度の乏しい部分が明確になったという意見が多かった。

これも学生が主体性を持って指導することによって得られる学びであり「アクティブラーニング型授業」の成果であると考えられる。

次に Q3 の地域へと活動範囲を拡大してみても、大学内だけの学びとの違いはありましたかという質問には 20 名全員が「違いがあった」と回答している。特に多かったのは、初対面の相手に対して指導することや一緒に学習することによって得られる新鮮味や緊張感が起因している回答意見であった。また、指導対象の年齢が自分たちと異なる場合にも言葉を選択し接する態度にも配慮しなければならず、学習環境に良い緊張関係が生じたことも関係していると考えられる。これは「地域貢献活動型フィールドワーク」の成果であろうと考えられる。

次に Q4 の大学体育（剣道）の充実に図る上で、地域活動との連携について、どう思いますかという質問にたいしては、19 名の学生が「非常に良い」もしくは「良い」という回答をしている。

特に多かったのは、大学で学習した内容を自分が実際に指導する立場になることによって、自身の中で整理、復習され、理解度が深まるといった回答意見が多かった。

また、多くの人と関わりあう中で新たな発見や気づきを得る経験ができたことや将来、教員や指導者を目指している学生にとっては、

現場を知ることのできる貴重な体験になったという回答意見が多かった。これは学生の学習意欲を高める上でも効果的であると考えられる。

次にQ5の大学体育（剣道）で学習したことを地域活動の中で自分が指導してみて、キーワードの中で感じたものは何かという質問に対して、学生が選んだキーワードの中で最も多かったのは「伝える難しさ」であり、次が「指導方法」であった。どちらも学生たちが授業の中で学習した知識や動作といった内容を自身の中で復習し理解を深める、もしくは自分の言葉に置き換えて解説等できるようにならないと伝えることや指導することは困難である。

この自分の言葉に置き換えられるまで、学習した内容を咀嚼し理解することが、深い学習へと繋がり⁶⁾、大学体育の充実へと繋がると考えられる。

また、学生が選択した他のキーワードからも大学内における従来の学習スタイルである教員から学生へ技術指導（教示・伝達・紹介）といった一方通行的なものでは得られないものが多かった。

これは学生が「教わる立場」だけでなく「教える立場」にたつ「アクティブラーニング型授業」や学習する環境を学外に求めてみる「地域貢献活動型フィールドワーク」によって初めて得られるものである。また、これらの学びを学生も望んでいる点は興味深いことであると考えられる。

V. まとめ

本論では、本学で開講されている体育実技科目の剣道を受講している（受講していた）学生を対象に研究をすすめた。

大学体育の充実を目指すうえで、学生が指導されるだけでなく、指導する経験を得られるように「アクティブラーニング型授業」と「地域貢献活動型フィールドワーク」を新たな試みとして取り入れた。

「アクティブラーニング型授業」を通じて、教員から指導を受け学習するという受身な姿勢だけではなく、どのように自分の言葉で相手に指導し伝えるかを考察し協議することによって理解度をさらに深めていくことができた。

また、指導する経験の中で自身の理解度だけでなく性格や人との関わり方なども学習している学生もいた。さらに、自身の競技レベルに関係なく、大学体育の授業で学習した内容を自分でも他人に指導できるという成功体験が自信と達成感や充実感に繋がったという報告もあった。

「地域貢献活動型フィールドワーク」を通じて、学生たちが実際に地域という学外へ学習環境や活動範囲を拡大することによって、初対面の相手への指導経験を通じて、間違っただけでは指導できないという責任感や自分の考えや説明を相手に理解してもらおうとする工夫といったことを学習することができた。

学外の人々と交流を持つことで、多様な視点、広い視野を持つあるいは持つようとするきっかけを得ることができた。さらに学生の中には将来、教員や指導者といった専門的な立場を志している者もおり、指導現場を肌で感じ、体験できていることは大変貴重な経験であると考えられる。

また、視点を変えると地域との連携は学生のためだけになるものではなく、大学の取り組みや大学が目指しているもの、さらにいえば大学そのものを地域や地域の人々に広く知ってもらえる機会にもなる⁷⁾。

地域にとっては、大学の専門的な知識や技術、若い指導者といった人手が得られることは非常に好まれることであり、大学にとっても学生たちの深い学びを得られる経験の場を得ること、地域に大学を知ってもらう広報活動や協力体制の構築は少子化が進む現代において大学にとっても大きなプラスであると考えられる。

大学体育の充実を図るうえで、本研究で取り組んだ新たな試みは、大学体育における授

業を通じて、その科目の技術以外に何を教えるかといった「プラスα」の部分が多く見出すことができた。この結果から、本論で取り上げた内容は、大学体育の充実にむけた1つの足掛かりになると考えられる。

VI. 今後の課題

本研究は、体育実技科目に対する一定の技量や知識が必要であると同時に地域の理解と受け入れ体制が整っていないと充実した学習や活動はできない。今回、アンケート調査をおこなった学生は本学の体育実技科目「剣道」を受講していることに加えて部活動においても、剣道部員として専門的に学んでいる学生が対象である。今後は、体育実技科目「剣道」を受講している学生で剣道部員ではない学生にも対象を広げていくことやアンケート調査を依頼する人数も増やして、より幅広い対象を研究対象にしていくことは今後の課題としたい。

VII. 謝辞

本研究は、あざみ野第二小学校で活動されている「はまっこスクール」の新田先生や鴨志田第一小学校で活動されている「キッズクラブ」の梅山先生や「NPO 法人わくわく教室」の中安先生といった多くの地域で活動されている方々のご理解とご協力を得て成り立っている。学生共々感謝します。また、今後も相互に協力できる体制の構築と工夫を模索していきたいと考えています。

【注】

- 1) 田代浩二氏も『「大学体育」の意義を考えよう——授業実践の一見地から——』の中で同様に指摘している。
- 2) 本論では、溝上氏が定義する「アクティブ

ラーニング型授業」を念頭に捉えている。

- 3) 本論では、野島章吾氏の『大学体育における地域貢献活動型フィールドワークの意義——関西学院大学総合政策学部白山麗実習5年間の活動から——』における地域貢献活動型フィールドワークの考え方を基にしている。
- 4) 本論では、神奈川県青葉区にある、あざみ野第二小学校の「はまっこスクール」と鴨志田第一小学校のキッズクラブで剣道体験教室として、学生たちが授業で学習した経験を基に指導経験をさせていただいている。
- 5) 本論では、神奈川県青葉区にある、NPO 法人わくわく教室で剣道教室として、学生たちが授業で学習した経験を基に指導経験をさせていただいている。
- 6) ここに、松下佳代氏も著書『ディープアクティブラーニング 大学授業を深化させるために』において説かれている授業や学習における深化があるのではないかと考える。
- 7) 長田進氏も『大学の地域貢献についての一考察とその事例』の中で、同様な指摘をされている。

【主な参考文献】

- ・ 高瀬武志『体育実技「剣道」におけるアクティブラーニング型授業の模索——有段者・経験者・未経験者が共に学び合える授業展開を目指して——』大学体育 No.109、pp.70～73.
- ・ 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』、東信堂、2014.
- ・ 松下佳代『ディープアクティブラーニング 大学授業を深化させるために』、勁草書房、2015.
- ・ 野島章吾『大学体育における地域貢献活動型フィールドワークの意義——関西学院大学総合政策学部白山麗実習5年間の活動から——』関西学院大学総合政策学部研究会総合政策研究、2015年、pp.87～119.
- ・ 長田進『大学の地域貢献についての一考察とその事例』慶應義塾大学日吉紀要刊行委

員会、慶應義塾大学日吉紀要、社会科学
no.19、pp.15～28.

- 沖村多賀典『スポーツ・健康分野における大学の地域貢献について』名古屋学院大学
年報 2014 年 27 号、pp.41～52.
- 清水茂幸、他『体育的学力の向上を目指した授業の構想——授業研究を中心とした地域貢献活動——』岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集 2、
2015 年、pp.19～24.
- 陳洋明、他『小学校教員養成課程の学生による地域でのスポーツ指導の意義——近隣小学校における「スポーツ講習会」の実践から——』国士舘大学体育・スポーツ科学学会、体育・スポーツ科学研究 (15)、
2015 年、pp.81～93.
- 永谷稔、他『バレーボールを通じた学生指導者の地域貢献活動について：札幌市 A 区体育館における初心者小学生指導活動から』北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報 2016 年 7 号、pp.165～170.
- 福岡孝純『大学におけるスポーツの人間学的意義について』法政大学体育研究センター紀要 11、1993 年、pp.59～71.
- 笹原妃佐子、他『大学における体育の意義について』大学体育学、3、pp.15～23.
- 森田啓『大学体育の意義・役割に関する一考察』大学体育研究、2000 年 22 号、pp.1～8.
- 田代浩二『「大学体育」の意義を考える——授業実践の一見地から——』スポーツ健康科学紀要、2017 年 14 号、pp.47～54.
- 松田裕雄、他『大学体育の価値向上に向けた一考察——教育実践における目標・教授・学習に着目して——』大学体育学、9 号、pp.69～92.